

## 基本目標1について

- 知立市では毎年冬場に市民参加型でイルミネーションを行っているが、そうした市民参加型のイベントを通じて、シビックプライドを醸成するのもよい。（内田座長）
- 観光資源のブラッシュアップのみならず、シニア層の生きがいを作りつつ、若者・シニア両世代の橋渡しでコミュニティを再構築できると若年層の定住化につながるのではないかと。（内田座長）
- 外国人を呼び込むには、SNSやFBなどのロコミは非常に重要であるし、名駅からのアクセスの利便性を生かすためには、名駅以上のスピードで清須市が多言語表記などに対応することも必要。（内田座長）
- シビックプライドについては、義務教育段階や高校で、基礎知識を醸成することは必要なことで、全国区の情報としてブランド化したときに、地元の人もプライドを高める傾向がある。（内田座長）
- 企業版ふるさと納税が導入されるので、企業との連携についても重視してほしい。（内田座長）
- これだけ名駅に近いと、娯楽施設は名駅周辺に引っ張られる。個人的には清須はベッドタウンに徹してもよいのではないかと思う。（内田座長）
- 若年層は可処分所得が低いため、消費者としてみるよりは、子どもを産み育てる若い女性がいなくなることへの危機感から、特に女性に魅力的なまちづくりと情報発信が必要。（内田座長）
- シビックプライドの醸成は、戦略提言会議でも非常にキーポイントになるという議論をしており、施策のひとつの位置づけではなく、もう少し大きな括りの中に入れていただきたい。（山本委員）
- 「きよすあしがるサイクル」はよいものなので、名古屋から10分の場所に、一人100円で自転車を借りられて、こんな景色やこんな美味しいものが食べられると情報発信をした方がよい。（富田委員）
- 役所が施策を打っても3年くらいで終わる。改善しながら継続させようと思うと、民間の資源や知恵を借りる必要がある。官民協働で清須を発信できるものを作ればとてもよい。（富田委員）
- 新川高校は地域の強い要請で作られたが、今日では市内出身の生徒は20%。高校が清須市にあることをあまり意識せずに卒業していく生徒も非常に多く、その辺りが母校愛の希薄化につながっていると考え、教育での地域の文化や歴史の活用を目標に掲げて今年から取組みを始めている。その意味でシビックプライドはもっと大きく前面に出し、具体的な施策としては、教育と地域資源をうまく結びつけていくという方がよい。（北山委員）
- 大学はいろいろなところへ出ていくが、再び愛知県に戻ってくる生徒も多く、自分が若い時代に人間形成したところが清須であるというのは、定住化につながるのではないかと。（北山委員）
- 教育と地域資源の活用を考えると、小中高の連携を深めることも必要。（北山委員）
- 清洲城の活用は不十分。特産品を販売する「城の駅」といった取組みを始めてはどうか（舟橋委員）
- 若い女性の目でお城や遺跡を解釈することは、今の時代、大変重要。取組み方が硬いので、若者受けのする情報発信の仕方に工夫してほしい。（舟橋委員）
- 落ち着いた静かな雰囲気のある清須も重要だが、若者が集まれるような施設も必要。（舟橋委員）
- 情報の格差がある中で、大都市の情報に対して、清須の情報が皆さんに知れ渡るような発信方法や、地元の人が誇りを持てる地域にするためのアプローチとして、市民参加型といった工夫が必要。（山田委員）
- 清須学の根本に「見えざる価値」の再認識がある。名古屋との関係性等、知られていない情報を表に出して、皆で認識し合うことを原点にする必要がある。（山田委員）
- 清須は大きな地域ではないが、多くの観光資源を持っている珍しい地域だ。（平野委員）
- 中部地区に住む鹿児島県霧島市の出身者で構成する「霧島ふるさと会」という組織があり、年に2、3回集まって、今地元はどうなっているかといった話をしている。他の地域に住まわれている方も、清須に愛着を持っていると思うので、組織化できるかは別として、そうした観点も必要。（平野委員）

## 総合戦略全体の構成、基本目標2～4について

- 先進国では将来的に、クリスマスよりハロウィンの方がイベントとして重要視されるのではないかと。清洲城周辺を舞台に、武将関係だけではなく、ハロウィン関連の参加型のイベントも重要。（内田座長）

- 基本目標のイメージ図はお城をデフォルメしたデザインで、一番上に基本目標1をおき、一番下にベースとなる基本目標4をおいて、直接的なワードを入れてもよいのではないかと。（内田座長）
- シニア層と若年層がリアルな空間で触れ合うことを通じて、最終的には清須のシビックプライドが生まれるところまでつなぐと素晴らしい。（内田座長）
- 土田かぼちゃなどの様々な地元の特産品については、CoCo 壺番屋さんなど民間企業と連携することによって、清須のブランド化に活用できるのではないかと。（内田座長）
- 経営資源の配分や着手すべき順など、優先順位を示してもらえると検討がしやすい。（山本委員）
- 基本目標4は、他の目標と比べてかなり長期的な目標。KPIの設定をどうするのか。（山本委員）
- 基本目標のイメージ図は、これだけ見れば、ある程度は内容が分かるものにした方がよい。（山本委員）
- 特産の土田かぼちゃと若者に人気のハロウィンを結びつけると面白い。（富田委員）
- 上から目線で教えるのではなく、市民の内発的なもので地域が盛り上がるのが一番よく、夏休みの空き教室などを利用して、誰でも先生、誰でも生徒といった取組みも面白い。（富田委員）
- 若者と高齢者を分けて考えているが、例えば、児童虐待防止のオレンジリボンと、認知症サポーターのオレンジリングを、オレンジつながりで一緒にし、子育ても介護もみんなと一緒に考える機会を作るのもよい。（富田委員）
- 目標4については、ハード面ではなくソフト面の考え方も必要ではないかと。例えば、助け合いができるコミュニティの構築は、「安全・安心で快適に暮らせる」ことにつながるものであり、そのための円卓会議を設けたり、防災訓練の実施を位置付けたりすれば、KPIも設定できるのではないかと。（富田委員）
- 高校で、高齢者との交流授業をやっており、相互にプラスになっている。高齢者だけの視点ではなく、高齢者が若い世代とどうつながっていくかという視点も入れるとよい。（北山委員）
- 若い世代は、人間関係が希薄で、うまくいかなかった時にそれをどうクリアしていくかが身につけていない。経験や体験がないため、できないことも多く、もっと人間関係を深めていくような取組みが必要。（北山委員）
- ボランティア団体がとても多くあることを知り、驚いた。ただし、横の連絡や統括する仕組みがなく、積極的な情報発信もされていない。もっと上手に知れ渡らせることが重要。特に男性は、構えてしまって、既存のグループに入りづらい。私は戦略提言会議で「定年式」を提案したが、そこで、ボランティアの活動や年金の有効利用の方法などを説明したりすれば、「定年式」に参加してもらえるのではないかと。（舟橋委員）
- 人口は増えているのは、若者が増えているから。彼らが望んでいるのはベッドタウンだとすると、高齢者やボランティアとの結びつきはない。隔絶された社会が二つできてしまうので、これを上手に結びつけないといけない。（舟橋委員）
- 短大で行っている体力測定の中で認知症テストを実施しているが、そういう心配のある人を見つけたら症状が進まないようにすることが、これから大事になってくるし、その家族のフォローについても、全体としてどう支えていくのかを、これからは考えていかないと。（舟橋委員）
- 清須について知られていない情報や、拡散した情報を集約する場が必要。（山田委員）
- 清須学講座を受けられた方が核となって、地域の中に情報発信をしていただく役割を持っていただくことは、地道な活動だが非常に重要。言葉だけではなく体で感じるということが非常に重要。（山田委員）
- 戦略提言会議では、結婚支援の話をしてきた。時代の流れを考えると、行政が関与する必要も出てきたのではないかと。（平野委員）
- 小さなお子さんをお持ちのお母さんと、子育て経験者の交流会があれば、義理の母親から言われるとカチンと来るとも一般論として受け入れられ、吸収できるのでは。（平野委員）
- 戦略提言会議の中では、子育て支援センターが土日休みなので不便との意見も出た。行政の施策は、利用者目線で行わないと、実施していても効果が十分でないこともある。（平野委員）